

## 第64回山口西田読書会プロトコル

竹本拓矢

## 1. 前回の議論要約

問い：『主客未分の分別があるとしたら、それは「善の研究」と矛盾するか？』

前回の議論では言語が判断の材料として扱われた。純粹経験は直観によるものであり、純粹経験を説明する言語が混じっていれば、それはもはや純粹経験ではなくなる。しかし、ここで言葉にならない経験とはどういうものかという問いが出た。人間はどのような経験でも言語化しようとし、言語化できないものを長く経験していけば精神が崩壊すると言う。この時、人類が言葉を使い始めたのはごく最近のことであり、それ以前はどうなっているのかという疑問が出た。答えは出なかったが、我々が想像できないかぎり語り得ないものであるように思われる。

次に問いの議論に移り、主客未分の分別はあり善の研究とは矛盾しないという意見が出た。「現在の意識を分析した時にも、その分析せられた者はもはや現在の意識と同一ではない：Ⅰ 1-3」とあるように、判断の前に区別があるため読んでいる自分と読んでいることへの衝突が起こらない。「例えば我々の意志活動について見ても、動機の衝突のない時には無意識である：Ⅱ 9-3」とあるように、衝突という概念が示されている時点で区別があることになる。

その後、第2編第8章の自然を読み、自然の本体は未だ主客の分かれざる直接的経験の事実であるということが確認された。「一本の植物、一匹の動物もその発現する種々の形態変化および運動は、単に無意義なる物質の結合および機械的運動ではなく、一々その全体と離すべからざる関係をもって居るので、つまり一の統一的自己の発現と看做すべきものである：Ⅱ 8-4」とあるように、無機物の結晶においても統一的自己があると認められた。ここで自然が統一を目指すのならば、進化によって種が分かれていくことは起こり得ないのではないかという疑問が出た。これには「進化によって種は分かれていくが有機的なつながりにより一つになっていく」という結論が出された。また、卵や種の中には潜勢力があり、この潜勢力が自然の統一力に相当する。

## 2. 自然の解釈

- 自然 ≠ 客観的実在
- 自然の本体は未だ主客の分れざる直接経験の事実である。
- 自然は抽象的概念ではなく具体的事実である。
- 自然は自己(統一的自己)を持っている。

## 3. 問い

- 真の自己とは何か？(精神に至ってなぜ始めて現れ得るのか？)
- 「自然は意識を具したる意識の具体的事実である」なら、自然に精神はあるのか？